

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院学生研究
2024年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院			キリスト教学 研究科	キリスト教学 専攻
研究代表者 (2025年3月現在 のものを記入)	在籍課程・学年			氏名	
	<input checked="" type="checkbox"/> 博士前期課程 2年 <input type="checkbox"/> 博士後期課程 年			辻田 青	
指導教員	所属部局・職名			氏名	
	文学部・教授			加藤 磨珠枝	
自然・人文・社会の別	自然	・ 人文	・ 社会	個人・共同の別	個人 ・ 共同 名
研究課題	昭和初期の和風教会建築研究——奈良基督教会を中心に				
研究組織 (研究代表者 ・ 共同研究者) ※2025年3月現在 のものを記入	在籍研究科・専攻・課程・学年			氏名	
	キリスト教学研究科 キリスト教学専攻 博士課程前期課程2年			辻田 青	
研究期間	2024 年度				
研究経費 (1円単位)	(支出金額) 135,485円 / (採択金額) 200,000円				

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

当該研究の研究目的を含むこと。

本研究の目的は、昭和初期（1930年代）の和風教会建築を対象に、それらの建築的・美術的特徴、さらに意匠設計における影響関係について考察することである。中でも日本聖公会の奈良基督教会を研究の中心に据え、これと同時代に建設された聖公会の教会堂3件をあわせた計4件を対象とした。本研究では建築意匠、特に細部意匠に注目し、建物外観の装飾である鬼瓦と懸魚をとりあげ、各作例の比較を通し、その意匠に共通性があることを明らかにした。さらに、これら細部意匠に共通点ないし類似点がみられる理由を明らかにするべく、各教会堂の影響関係、すなわち設計時に先行作例の意匠を参考にしたのかどうかについても考察を深めた。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

〔 日本聖公会 〕 〔 教会建築 〕 〔 近代和風建築 〕

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

以下の視点を含めて記載のこと。

- ・当該研究は何をどこまで明らかにできたのか(できなかったのか)。
- ・何をもちて研究成果(経過)を達成できた(できなかった)と考えられるのか。
自身が設定した研究目的・目標に照らして、その根拠がわかるよう記載のこと。

昭和初期の和風教会建築を扱った従前の研究史では、教会自体の成り立ちや教会堂の建設経緯、建築的特徴を調査・分析した建築史的研究が中心となっている。その建築的特徴に関する議論においては、建物全体の構造・意匠にばかり目が向けられ、装飾といった細部意匠についてはほとんど注目されてこなかった。しかしながら、本研究において示唆されるように、細部意匠は和風教会建築の建築的・美術的特徴を考察するうえで重要な要素である。本研究では細部意匠の中でも、建物外観の装飾として最も装飾性に富む鬼瓦と懸魚に着眼点を置き、奈良基督教会(奈良市、1930年)、スミス記念堂(彦根市、1932年)、上田聖ミカエル及諸天使教会(上田市、1932年、以下「上田教会」)、桃山基督教会(京都市、1937年)の4件の日本聖公会の教会堂を主たる研究対象としてとりあげた。本研究の主な内容と成果を以下にまとめる。

① 細部意匠(鬼瓦・懸魚)の分析・比較**意匠にみる諸特徴の考察**

それぞれの鬼瓦・懸魚の意匠の分析は先行研究では不十分であったため、その再考をするとともにそこに描かれたモチーフについて考察した。本報告では奈良基督教会の作例について記す。

奈良基督教会の鬼瓦に関しては松波の研究(1996b)を再考しつつ、新たな指摘を行った。鬼瓦の最上部に浮き彫りにされた十字が刻まれた三葉について、その十字の形状に関して、松波の研究ではマルタ十字であると述べられているが(松波 1996b, 92)、本研究ではカンタベリー十字かクロス・パティ型十字の一種である可能性を提起した。また、その下には一対の鳩があらわされ、本研究では平等院鳳凰堂の屋根に載る鳳凰との形態的類似、またモチーフと構図の観点で類似するものとして、「対い鳩」の家紋と鶴岡八幡宮本宮楼門の扁額の八の字について指摘した。しかしながら具体的に何のモチーフを描いているかについては、そのすべてが明確ではなく、かつ文献資料にも示されていないため特定には至らなかった。

懸魚において特徴的であるのが、四葉(懸魚の中心に据えられる装飾)の形状的改变、あるいは類似形状の十字装飾への置換である。社寺建築一般の四葉では各葉が接触し猪の目が形成されるのに対し、こちらでは各葉が互いに独立し、十字形状が顕著である。これはキリスト教的意味合いにおける十字架を意識したものだと考えられる。

比較を通して明らかになったこと

4件の教会堂の作例の比較を通し、そこに描かれるモチーフや構図に共通点ないし類似点がみられることを示した。第一に共通するのが、キリスト教的なシンボル性を持ったモチーフを瓦(鬼瓦や巴瓦など)や懸魚といった和風建築従来の建築・装飾要素にあしらっている点である。十字については全ての教会堂の鬼瓦に採用され、懸魚では桃山基督教会を除く3件のものに確認できる。加えて、鳩や葡萄といったものを和風を基調とした建物外観の装飾として、破綻がないような自然な形態で描いていることが指摘できる。

続いて、まず鬼瓦に関していえば、桃山基督教会の鬼瓦は奈良基督教会のものを踏襲しており、これは模倣ではなく同じ工房によって製作されたものである。上田教会では一部のモチーフと構図、そしてその描かれ方は異なるものの、上記2件のものとほとんど一致している。注目したいのがこの3件に共通するモチーフである「向かい合う一対の鳩」で、スミス記念堂の鬼瓦では葡萄と十字が造形されているため全く相違するが、建物正面入口(向拝)の虹梁にこのモチーフが彫刻されている。これを装飾に使用した和風教会建築は、少なくとも現存するものの中では4件の他に類例をみない。

懸魚では、奈良基督教会、スミス記念堂、上田教会に共通・類似する要素がみられた。奈良基督教会の懸魚の意匠において前述した十字を意識したものだと考えられる四葉が、他2件の懸魚でも用いられていることがわかった。鬼瓦の「向かい合う一対の鳩」に同じく、十字形状の四葉の採用は管見の限り類例を知らない。さらに、桃山基督教会の懸魚では社寺建築一般の六葉が採用されているものの、巴瓦に上記3件の四葉と類似形状の十字があしらわれていることを指摘した。加えて、同様に懸魚ではないものの、カトリック豊中教会(豊中市、1939年)の教会堂に隣接するヨゼフ館の妻飾りには、これと類似形状の十字装飾が用いられていることを示した。さらに、この十字の形状がキリシタンの墓碑や関連施設の鬼瓦と巴瓦に施されていた「花十字紋」の紋様と類似することを指摘したが、この説を裏付ける文献資料は今のところ見つけられていない。

研究成果の概要 (つづき)

以上のように、鬼瓦や懸魚といった細部意匠にキリスト教的意味合いを持ったモチーフをあしらう、あるいは従来そこに施されるモチーフや装飾を置換したり、その形態を改変したりすることで、社寺建築に類するような和風を基調とした建築を、キリスト教の教会堂として成立させるために創意工夫が施されていると評価できるだろう。

② 意匠設計における影響関係の考察

4 件の教会堂の鬼瓦と懸魚の意匠を比較することで、上述したような意匠の共通性を明らかにした。ここで得られた成果をもとに、共通点の存在についてその理由の解明を試みるため、4 件の教会堂における意匠設計上の影響関係の有無について探った。この影響関係の存在を裏付けるものとして、地域、宣教団体、宣教師、設計者といった建設に関わる背景を文献調査した。

奈良基督教会

教会記念誌によれば、設計者の大木吉太郎は京都地方部監督の S. H. ニコルスと主任司祭の吉村大次郎と共に「熊本のハンナ・リデルの回春病院の建物」を視察したが、設計の参考になる点はほとんどなかったという（日本聖公会奈良基督教会編 1966, 141）。実際に顕著な共通点があるとはいえ、先行研究（松波 1996a）でも特筆されない。

上田聖ミカエル及諸天使教会

上田教会がその設計において奈良基督教会を参考にしたことは教会記念誌などの文献資料で明示されており、山田らの先行研究（2018）でも既に指摘されている。しかしながら完全な模倣ではなく独創性を確認することができ、鬼瓦と懸魚の意匠がその一つであることを指摘することができる。

桃山基督教会

実際の設計者をめぐる議論を通して、桃山基督教会の基本設計には奈良基督教会の設計者である大木吉太郎の関与があった蓋然性が高いことを指摘した。大木による設計関与の可能性については既に松波（1997）によって指摘されている。ここでは書類上（図面や建築認可申請書）の設計者は野田音蔵という大工であること、そして奈良基督教会とは意匠と規模の観点から相違することを指摘する中川の調査報告（2006）と、松波の提示するいくつかの根拠、および筆者自身の調査結果をあわせて検討した。結論をいえば、奈良基督教会と同一意匠の鬼瓦が桃山基督教会に導入された経緯に関しては、大木がその担い手になったと考えられる。

スミス記念堂

スミス記念堂の場合、上田教会や桃山基督教会のように文献資料から影響関係を探ることはできなかった。しかしながら、次の根拠により奈良基督教会の意匠に示唆を受けた可能性を指摘することが可能である。(1) 献堂年および建物完成年が奈良基督教会の方が古い。(2) 奈良基督教会と同じ京都地方部（現・京都教区）の教会堂であり、同教区での宣教を担ったアメリカ聖公会の内部では奈良基督教会の情報が共有されていた。(3) スミス記念堂の建設を主導したアメリカ聖公会宣教師／彦根聖愛教会司祭であった P. A. スミスは、京都地方部の教会堂、会館、牧師館の建設や修繕に携わっていた（筒井 2009, 74）。したがって、上述してきたような細部意匠の共通性を踏まえれば、部分的に奈良基督教会のものを参考に設計された可能性があると考えられる。

以上の議論により、奈良基督教会において採用された特徴的な意匠の鬼瓦と懸魚が——奈良基督教会において生まれたとは断言できず、中継点である可能性もあり得る——その建設後に複数の教会堂においてその意匠が波及した（スミス記念堂においてはその可能性が高いといえる）ことを示した。

【参考文献】 筒井正夫、2009、「スミス記念堂の保存活用をめぐる市民運動とまちおこし」『彦根論叢』第 348 号、73-97 頁。／中川理、2006、「50 日本聖公会桃山基督教会」京都市文化市民局文化財保護課編『京都市の近代化遺産—京都市近代化遺産(建造物等)総合調査報告書(近代建築編)』京都市文化市民局文化財保護課、75 頁。／日本聖公会奈良基督教会編、1966、『日本聖公会奈良基督教会八十年史』日本聖公会奈良基督教会。／松波秀子、1996a、「昭和初期の和風キリスト教会堂——近代和風の一面」上野邦一・片木篤編、『建築史の想像力』学芸出版社、108-129 頁。／松波秀子、1996b、「昭和初期の和風キリスト教会堂について——奈良基督教会を事例に」『清水建設研究報告』第 64 号、87-96 頁。／松波秀子、1997、「昭和初期における日本聖公会の和風教会堂建築についてその 3——日本聖公会の建築史的研究 5」『学術講演梗概集・F-2, 建築歴史・意匠』1997 年号、27-28 頁。／山田幸正・山下王世・西原廉太ほか編、2018、『平成 29 (2017) 年度 長野県日本聖公会教会堂建築調査報告書——岡谷聖バルナバ教会・上田聖ミカエル及諸天使教会調査』首都大学東京都市環境学部建築学科山田幸正研究室。

※この(様式 2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差控え期間等を記入した調書(A 4 縦型横書き 1 枚・自由様式)を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。なお、成果発表を確認できる資料を合わせて研究成果報告書提出フォームより提出してください(紙媒体等、研究成果報告書提出フォームから提出できない場合は、別途リサーチ・イニシアティブセンターへ提出してください)。

- ①雑誌論文(著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書(著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催(会名、開催日、開催場所)
- ④その他(学会発表、研究報告書の印刷等)

※修士論文・博士論文は含みません。

① 雑誌論文(著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)

辻田青、2024、「奈良基督教会の鬼瓦・懸魚とその波及」『DEREK』第43号、73-99頁。

② 図書(著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)

該当なし

③ シンポジウム・公開講演会等の開催(会名、開催日、開催場所)

該当なし

④ その他(学会発表、研究報告書の印刷等)

該当なし